

# 令和7年度 体育部会研究計画

## 1 研究主題

### 子供の主体性を育む 体育学習

— 「おもしろいコト」が共有された世界で子供が主体性を発揮し続ける学び —

## 2 主題設定の理由

### (1) 現行の学習指導要領が求めているもの

現行の学習指導要領改訂のポイントとして、学力観を「教え込みによる『内容の習得』」から「自ら学ぶ『資質・能力の育成』」を基盤としたものへと拡張したことが挙げられる。その理由は、現代の技術革新やグローバル化に伴い、社会の変化が一層激しくなり、未来の課題を予測することが難しくなっているため、単に知識を獲得するだけでは対応できず、獲得した知識を基に考え、課題を発見し解決する力が求められるようになってきているからである。予測困難な時代（VUCA）において、自らの考えをもって活動できる人材の育成が求められている。

そして、このような時代を生きぬく力（生きる力）を育むための具体的な視点として、「資質・能力」が「三つの柱」に整理された（図1）。「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」である。これらは、教育活動全体を通して育成を目指す「資質・能力」であると、学習指導要領解説（総則編）に明記されている。それを実現するために「どのように学ぶか」の視点として、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が提起されている。



（図1）育成を目指す「資質・能力」の三つの柱

（文科省「学習指導要領改訂の方向性」より引用）

体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」と示されている。その目標達成のためには、子供の発達の段階を踏まえて、学習したことを実生活や実社会に生かすとともに運動の習慣化につなげ、豊かなスポーツライフを継続することができるよう、系統性のある指導ができるように、引き続き指導内容の体系化を図ることが重視されている。さらに、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められている。つまり、これらを実現するために、体育科としてどのような方法で実践すればよいのかが我々に求められていると言えよう。

### (2) これまでの研究のあゆみ

本体育部会では、これまで樹木の生長を例に教師は、子供が「うまくなりたい」「よりよくなりたい」と技能の向上や知識の獲得（目に見える花や実、幹）を目指していく中で、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」（目に見えにくい根）が共に育成されることを大切に授業を展開してきた。そのために、単元の初めには、子供が「参加してみたい・考えてみたい」と思えるような運動や、健康に関するテーマを提示することで、すべての子供が安心して参

加できるようにした。その中で、「おもしろいコト」を共有し、その運動の価値を分かち合うことで、体育学習に対して苦手意識をもつ子供も、夢中になって挑戦する姿が見られたという報告があった。これは、子供が「うまくなりたい」と自ら課題を発見し、解決しようと挑戦する姿が数多く見られたということである。

このような成果から、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、「三つの柱」を育成するためには、子供の主体性が重要であることが分かった。そこで昨年度からは、「主体性」に焦点を当てて、研究を進めている。そうすることで、「資質・能力」の育成につながるのではないかと考えられる。

### 3 副主題設定の理由

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには「主体性」が必要であることについて、主題設定の理由で述べた。今回、副主題で示した『『おもしろいコト』が共有された世界で子供が主体性を発揮し続ける学び』は、「主体的・対話的で深い学び」が求めている学び方の視点からの、授業改善にむけた方策の一つになると考えている。その理由を以下に示す。

#### (1) 「おもしろいコト」の共有について

「主体的・対話的で深い学び」の実現には、子供同士や先生との対話といった協働性が必要である。そのためには「話題にしたい共通のテーマのもとに、一方的ではない双方の学び合い」が重要だと考える。本研究で示している『『おもしろいコト』の共有』は、これらのことを実現するための方法の一つである。ここで「おもしろいコト」と『『おもしろいコト』の共有』について詳しく見ていくこととする。

「おもしろいコト」 → 「出来事（コト）」 + 「おもしろい」

「出来事（コト）」・・・ 「その運動で誰もがしようとしている（一連の）こと」

「おもしろい」・・・ 「上手くいくかどうかワクワクドキドキする」

※子供の実態に応じて「出来事（コト）」が「おもしろい」になるように教師が設定する。

『『おもしろいコト』の共有』 → その運動の「おもしろい」を体験し「こういうことに挑戦していけばいいんだ」とクラス全体で分かち合うこと

例えば、ボール運動領域ネット型「ソフトバレーボール」の学習では、「自コートにボールを落とさずに相手コートにボールを落とす」というやりとり（出来事）が行われている。このやりとりに対して、「ボールが怖い」「レシーブという技術が難しい」と考えている子供にとっては、上手くいくイメージが持てず、「おもしろい」と感じる事が難しい。そこで、教師が場やルールの工夫といった環境設定を行う。そうすることで、1時間目からおもしろいコトを体験することができ、子供が「こういうことをすればいいんだ」と見通しを持てるようにする。そして、「自コートにボールを落とさずに相手コートにボールを落とすことができるかどうか」（『おもしろいコト』）に挑戦していくことを全体で共有していく。

『『おもしろいコト』の共有』を行うことは、子供がこれから「何を学ぶか」をクラス全体で共有することにつながり、主体的・対話的で深い学びを具現化するために有効に働くと考える。

#### (2) 「AARサイクル」<sup><説明1></sup>について

「主体的な学び」は、学習指導要領解説（総則編）の中で、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活

動を振り返って次につなげる学びである」と示されている。

昨年度の研究において「主体性が発揮されている姿」を『『おもしろいコト』が共有された世界の中で挑戦活動をしている姿』とし、挑戦活動とは、**AARサイクル**を回していくことと定義した。AARサイクルとは、「期待（予想）」「挑戦」「振り返り」の学びのサイクルを回すことだと捉えている。つまり、AARサイクルを回すことは、「主体的な学び」を行う上で有効なツールになると言えよう。

### (3) 「本質的なおもしろさ」からみた運動の「見方・考え方」について

「深い学び」を実現するには、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが重要である。

学習指導要領解説（体育編）によると体育の「見方・考え方」は次のように示されている。

#### 体育の見方・考え方

生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」

平成30年度からこれまで、体育部会では「本質的なおもしろさ」からみた運動の特性に着目している。「本質的なおもしろさ」とは、「プレーヤー視点（授業では子供視点）」から見た、その運動やスポーツがもつ誰もが夢中になれるおもしろさのことである。教師は、学習内容を学ばせ、身に付けてほしいという願いをもって授業を構想するだろう。しかし、「主体的・対話的で深い学び」を実現するならば、子供視点から運動を捉えなければならない。夢中になって挑戦することをおもしろいと感じる中で、結果的に子供の技能が高まっていくと考えている。また、授業における「する・みる・支える・知る」の関わり方については、「挑戦する・他者からの情報を得る・友達と情報を伝え合い協力する・おもしろさや挑戦の仕方を知る」のような姿として現われるのではないだろうか。さらに、「深い学び」の視点として、「課題を見付けその解決に向けた学習過程」が挙げられるが、こちらも「AARサイクル」を回していくことで実現されると考える。

ここまで述べたように、本研究はまさに「主体的・対話的で深い学び」をどのようにすれば具現化できるか（どのように学ぶか）を示したものであるといえよう。今年度も、昨年度に引き続き「主体性を発揮する子供」に焦点を当てて、そこにはどのような「AARサイクル」が回っている（学びをしている）のかについて研究を進めていく。

## 4 研究内容

まず、昨年度の研究からあがってきた成果と課題について整理する。

### 【成果】

- 環境設定を工夫することで、その単元に苦手意識をもっていた子供が、安心して活動に参加することができ、単元を通して肯定的な意識に変わった。
- 教師の問いかけや言葉かけによって、子供のやりたいことが、明確になることで、挑戦しようとする姿が見られた。
- 振り返りを習慣化することで、子供は次にやりたいことを意識することができ、教師も実態把握や次への支援を考える材料となった。

### 【課題】

- 子供の主体性を意識しすぎた結果、適切な支援をすることに躊躇してしまう場面があった。
- 主体性が発揮されたエピソードをどのように書けばいいのか、イメージが難しかった。

学習指導要領解説（体育編）の体育科改訂の趣旨における改善の具体的事項では、「全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮する。」と示されている。昨年度の研究において、苦手意識をもっていた子供が活動に参加し、肯定的意識に変わったことは、大きな成果である。また、教師の問いかけや言葉かけ、振り返りによって、子供が見通しを持って学習に取り組めることができるようになったことから、「主体的な学び」へとつながったと言えるだろう。

一方で、主体性という言葉を意識するあまり、「子供に関わって支援をしてはいけない」と考えてしまう例があった。子供の思いに寄り添う中で子供が困っていたり、助言を必要としたりしている場合は、適切な支援が必要である。また、昨年度の研究成果として、「主体性が発揮されている姿」をエピソード形式で挙げてもらうようにしていたが、どのように示していけばよいかという点で課題が残った。このような点を踏まえ、今年度の研究内容を以下に示すこととする。

### (1) 子供がどのような挑戦活動を（「主体性」を発揮）していたかを見取る

昨年度は、「主体性」がどのような状況でどのように発揮したかについて、数多くの実践が展開された。しかし、「主体性が発揮されている姿」について、どこに焦点を当ててどのように見なければよいかのイメージを共有することに難しさがあった。そこで、これまでの実践や『主体性』が発揮されている姿の定義を参考に「主体性」が発揮される状況や視点について整理したい。

- 「主体性」は、『おもしろいコト』の共有が行われた後の時間において発揮される。
- 「主体性」の発揮は、個人に焦点を当てる。
- 『主体性』が発揮されている姿をどのような挑戦活動（AARサイクルを回していくこと）をしているかの視点から見っていく。

本研究では、主体性が発揮されている姿を、『おもしろいコト』が共有された世界の中で挑戦活動をしている姿と捉えている。つまり、主体性が発揮されている姿は、「挑戦活動をしている姿」として現われるだろう。そこで、エピソードの書き方として、「期待（予想）」「挑戦」「振り返り」の場面を交えながら示してもらいたい。ここで、陸上運動「走り幅跳び」を例に考えてみ

る。ただ砂場に跳んでいく活動では、苦手な子供にとっては跳ぼうとする意欲を持続することは難しい。そこで、誰もが自分なりの挑戦を行えるための支援として、着地を意識しやすいように砂場にいろいろなケンステップが散りばめられた環境を設定する。そして、教師から「ケンステップの中を狙って跳んでみよう」と、活動を提示する。子供が何度か跳んでみた後に、「いかにして狙ったところに着地できるかどうか」という『おもしろいコト』の共有を図ったとする。この後の挑戦活動の様子を以下に示す。

このような例を参考に、挑戦活動をしているエピソードが多数見られることを期待したい。

#### 挑戦活動をしているエピソードの例

A児は、「あのケンステップなら着地できそうだ」と何度も狙ったケンステップへ跳んでみる。しかし、勢いがありすぎて、なかなかケンステップの中に着地できずに、はみだしてしまふ。教師は、その様子を観察し、「Bさんはケンステップの中に着地しているね。どこが違うのかな。」と言葉かけをする。するとA児は、自分とB児との違いを観察してみると、自分が走り出す位置よりも近くから走り出していることに気付いた。それを参考にして再度狙ったケンステップへ跳んでみる。すると、何度かするうちに自分のイメージしたような着地ができ、満足した様子で友達と情報交換をしている。授業後、副読本の「学習のあしあと」には、「次は、もっと遠くから走って奥にあるケンステップを狙ってみたい」と書いていた。

今回の研究において個人に焦点を当ててエピソードを書いてもらうことにしたのは、より子供の内面を観察してもらいたいからである。

#### (2) 子供が挑戦活動をくりかえし行えるようにするために

上で示したような挑戦活動が学習（単元）の中でくりかえし見られるようにするには、教師の意図的な関わりが重要である。昨年度の研究内容にもなっていた「環境設定」、「問い」、「言葉かけ」と言った支援や「振り返り」について、再度整理をしておきたい。

##### ① 支援

これまでの研究からも、すべての子供が安心して運動に参加できるような「環境設定」や、試行錯誤できるような「問い」が数多く挙がってきている。しかし、本研究において着目している「言葉かけ」に関しては、子供の思いを大切にしている関わりが広がった一方で、「主体性」を意識するあまり、どのようなタイミングでどこまで助言すればよいのか分からず、判断に困っている子供に対して支援が十分行えていなかったと考えられる。子供が「気付ける」情報提供も大切にしていかなければならない。

##### ② 振り返り

昨年度の研究では、「行為の後の振り返り」<sup><説明2></sup>である「1時間単位」を習慣化することが重要だと述べた。それによって「行為の中の振り返り」<sup><説明3></sup>につながり、挑戦活動のサイクルをさらに回すことにつながると期待した。研究の成果として、副読本にある「学習のあしあと」を活用することが、有効に働くとの報告があった。子供にとって自分の学びを可視化することができ、次時の活動への見通しをもつことにつながった。さらに、タブレット端末でクラウドツールを使用した事例も報告されており、振り返りの方法もいろいろ考えられるであろう。

以上のような、子供が挑戦活動できるための手立てを講じることで、数多くの主体性を発揮した子供のエピソードがあがってくることを期待したい。

## 5 研究方法

### (1) 研究大会において

- 本年度は研究主題及び副主題の解明に向け、郡市研究会、「第66回徳島県小学校体育科教育研究大会（板野大会）」、「第63回中・四国小学校体育研究大会（島根大会）」において研究成果を発表する。

### (2) 各郡市部会において

- 研究主題及び副主題の解明に向けて、授業研究会及び研修会を行い、研究成果をまとめる。
- 研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有を図る。

### (3) 各校において

- 体育主任・体育部員を中心に、子供が主体性を発揮し続ける学びについて考察する中でどのように主体性が発揮されたのかを把握することで「三つの柱」をバランスよく育んでいく。
- 年間カリキュラムのもと単元学習の実施及び副読本の積極的な活用を通して、子供の主体的・対話的で深い学びを図ることで、運動好きの子供を育成し、体力や運動能力を一層向上できるようにする。
- 研究領域・研究学年については、提案発表郡市が決定次第示すこととする。

## <参考文献>

- (1) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 体育編」、東洋館出版社、2018
- (2) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 総則編」、東洋館出版社、2018
- (3) 文部科学省、「第4期教育振興基本計画」、文部科学省、2023
- (4) 徳島県小学校教育研究会、「令和7年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題」  
徳島県小学校教育研究会、2024
- (5) 徳島県小学校体育連盟、「第65回徳島県小学校体育科教育研究大会 研究紀要」  
徳島県小学校教育研究会体育部会、2023
- (6) 中山芳一、「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」、東京書籍、2022
- (7) 松田恵示、「『遊び』から考える体育の学習指導」、創文企画、2016
- (8) 梅澤秋久、苫野一徳、「真正の『共生体育』をつくる」、大修館書店、2020
- (9) 平野朝久、「はじめに子どもありき」、東洋館出版社、2021
- (10) 白井俊、「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」、ミネルヴァ書房、2020